

人(ひと)

滋賀県畜産技術振興センター試験研究科技術開発係
主査 渡辺千春



○職場の紹介

当センターは、試験研究はもちろん、家畜の改良増殖、後継者の養成など滋賀県における畜産のキーステーションとしての役割を担っています。また、平成6年の機構改革により、全国的にも珍しい技術指導部門が新設され、高度飼養管理技術や試験研究の成果を地域に適応した技術とし、積極的な普及指導に努めています。

○担当分野の紹介

畜産からの環境負荷を軽減するため、堆肥化促進、臭気抑制、汚水処理などの試験を行っています。現在は、乳酸菌資材が家畜の体内でどのような作用をし、排泄ふんの量と臭気にどう影響するのかを検討しています。また、琵琶湖の水草を家畜ふんで堆肥化する技術、ミルクー洗浄水や尿汚水の簡易浄化技術にも取り組んでいます。

○成果の概要

滋賀県は京阪神のベッドタウンとして、農村地域の混住化が著しく畜産環境問題は深刻です。中でも苦情発生が多くは悪臭関連であることから、臭気抑制に関する課題が主体でした。開放型畜舎から発生する家畜飼養臭の抑制試験では、高価な消臭剤や特別な脱臭装置を使わなくても、飲水器の改善や除ふん回数を増やすなど適正な飼養管理が徹底されていれば、悪臭として問題になるほどの臭気は発生しないことがわかりました。そこで、啓発冊子を作成し各地域で研修会を開催して、このことの普及指導に努めました。最近、適正な飼養環境の重要性が認識されてきていますが、パツとまけばサツと臭いの消える魔法のクスリに対する願望は根強いものがあるようです。

臭いの他には、堆肥化過程での大腸菌の消長に関する試験を行いました。まだ、残されている課題は多いのですが、おりしも0-157で家畜のふんが注目されていた時期でもあり、いろんな反響がありました。公衆衛生と家畜衛生の間に立ったこの分野は、畜産に携わる獣医師として、今後、重要な仕事のひとつになってくるものと思われまます。

○畜産関係を含めて、農業環境の保全について

農薬や化学肥料に依存しない環境保全型農業を確立していくためには、堆肥による土づくりが重要だと言われているものの、耕種側ではなかなか堆肥の利用が進まないのが現状です。そこで、耕種側の農作物残さを畜産側が処理し、畜産側の堆肥を耕種側が利用するというような、ギブ&テイクの関係を作ることにより耕畜連携を図ることが大切だと思います。そのためには、関係機関もしっかり連携し、コーディネーターとしての役割を果たすことが重要ではないでしょうか。

○21世紀を目前に控え、畜産環境はどうなるか

最近、畜舎の敷地内にバーベキューコーナーを設け消費者とのふれあい活動をしたり、牛舎の隣で手作りアイスクリームを販売したりする農家が増えてきています。多くのお客さんが出入りするようになると、見られることを意識して畜舎内はいつもきれいに掃除され、周辺には花や樹木が植えられるようになりました。また、搾乳体験やミニブタとのふれあいができる、畜産をテーマにした農業公園には、予想を大きく上回る来場者があります。

かつて、畜産は汚い、臭いといわれ地域社会から孤立したり、山の中へ移転したりしてきました。

しかし、いろんな面で価値観が多様化している現在、畜産の持つ多面的な機能をうまくアピールしていくことが、広い意味で畜産環境の改善につながるのではないかと考えています。

訂正とお詫び

「畜産環境情報誌」第3号 22ページの「人」で高橋明子さんと紹介いたしましたが高橋朋子さんの誤りでした。深くお詫び致します。